

図書館報

第126号
平成23年2月22日
大分工業高等専門学校
図書館
大分市牧1666番地
TEL 097(552)6084
FAX 097(552)6786



本年度、コンパルホールにて実施された「留学生の日本語スピーチコンテスト」。ナイム君は優良賞を受賞。

〈もくじ〉

題字「図書館報」	(校長 大城 桂作 書)	1
扉写真・「留学生の日本語スピーチコンテスト」	4M ナダルル ナイム	1
図書館長報告	図書館長 堀 栄造	2
留学生の日本語スピーチコンテスト原稿	4M ナダルル ナイム	3
推薦図書	一般科目(数学) 北川友美子	4
		機械工学科 坂本 裕紀	5
在外研究報告	制御情報工学科 嶋田 浩和	6
平成22年度・読書感想文コンクール入選者	8
編集後記	図書館長補佐 大木 正明	8

図書館をめぐる近年の動向

図書館長 堀 栄造



「第96回全国図書館大会」が、平成22年9月16日(木)～17日(金)に、「温故創新—平城遷都千三百年からの発信」という大会テーマの下、奈良で開催され、それに私は参加しました。

大会は、(社)日本図書館協会理事長の塩見昇氏による基調報告を以て始まりました。その基調報告の中で、「図書館をめぐる近年の動向」に関して重要と思われるものを、いくつか拾い上げてみようと思います。

まず第一に、今回の奈良大会開催は、平城遷都千三百年を記念したのもありますが、そればかりでなく、平成22年が「国民読書年」であることをアピールするものでもあるということです。文字・活字文化振興法の理念を受けて「すべての国民が…豊かな文字・活字文化の恵沢を享受できる環境の整備」が国会で決議され、平成22年1月27日には参議院議員会館で「国民読書年宣言集会」が開かれ、その後、国民読書年の趣旨に添った各種集会・要請・アピールなどが各地で盛んに行われました。

第二に、平成22年が「電子書籍元年」であるということです。平成22年5月のアップル社のiPad発売とともに、「紙の本はなくなるか?」という論議が盛んに行われたことは、周知の事です。総務省・文科省・経済産業省が「デジタルネットワーク社会における出版物の利活用の推進に関する懇談会」を設置し、平成22年6月に報告書が作成され、それに基づいて各省が分担して「日本型のオープンな電子出版環境等」の形成をめざすことになりました。それに伴い、「図書館資料のデジタル化とデジタル情報の収集・保存」が、今後ますます推進されることになるでしょう。

第三に、前項の内容と関連したものですけれども、「平成22年度補正予算による国立国会図書館の蔵書の大量デジタル化の進行」です。平成22年4月に、国・自治体等のインターネット資料収集に関する国立国会図書館法が施行され、「インターネット資料収集保存事業」が、推進されています。

第四に、「大学図書館のデジタル化の進行」です。総合目録データベースへの大学の参加機関の数は、平成22年3月末現在で1234にのぼり、機関リポジトリ数は117、本文コンテンツ数は58万件へ達しています。

以上のように、「図書館をめぐる近年の動向」に関して言えることは、一つには、文字・活字文化振興の

アピールがありますが、それは、「若者の活字離れ」が叫ばれる中、「文字・活字文化衰退の危惧の裏返し」と言えるかもしれません。そして、もう一つには、「デジタル化の流れ」です。これからの図書館は、資料・情報の収集・保存のデジタル化への対応を不可避的に迫られるということです。

「第96回全国図書館大会」第2日目は、テーマ別に会場を分けて16の分科会が開催されました。私は、「資料の活用と電子化」をテーマとする大学・短大・高専図書館の分科会に参加しました。

午前の部では、二つの基調講演が行われました。近畿大学中央図書館長の村瀬憲夫氏は、「地域の文化資料(奈良の万葉歌)の活用—図書館からのさらなる発信をめざして—」と題して、図書館が、地域の有する文化資料を活用し、それを教育・地域に向かって開き発信していくことの大切さを、奈良の万葉の歌を事例として講演されました。また、国立情報学研究所学術基盤推進部長の安達淳氏は、「機関リポジトリによる大学の学術コンテンツの電子化と提供」と題して、現時点の機関リポジトリは、学術論文とそれに近い情報の電子化と公開を中心に活動しており、今後は、論文のみならず、教育コンテンツ・データベースなど、大学の教育研究活動の過程で生み出されるすべての電子的情報のリポジトリとして機能していくことが期待されていることを、講演されました。

機関リポジトリは、学術論文をインターネット上で誰もが自由に読むことができるようにする手段として、研究者の属する機関においてセルフアーカイブとしての役割を担うとともに、大学の学術活動の成果を社会に還元するための手段としての役割をも担うこととなります。現在、大分高専図書館では、大分高専紀要・図書館報・図書館だより(学生図書委員会発行)・もさく(校内読書感想文コンクール入選作品集)を、機関リポジトリとしてインターネット上に公開しています。

「第96回全国図書館大会」第2日目の分科会の午後の部では、三つの事例発表が行われました。その中の一つでは、奈良高専准教授の鍵本有理氏が、「高専における学生図書委員会活動活性化の試み—効果的な資料収集・活用のために—」と題して、読書週間の取り組みやブック・ハンティング等の学生図書委員会の活動状況を発表されました。本校でも、学生図書委員会による年2回のブック・ハンティングや読書会を行っています。

最後になりますが、大分高専図書館では、平成22年11月より、「大分高専教員の著作・翻訳等の展示コーナー」が設けられました。そこでは、大分高専の教員が執筆した著作・翻訳等が、十数冊展示されています。図書館へお越しの節は、是非お手にとってご覧下さい。

日本できづいたこと

4M ナダルル ナイム



私は1年半前にマレーシアから日本にきました。日本に来て、面白い経験もあって、マレーシアと日本の大きな違いに気付きました。

文化や習慣でたくさんの違いがあります。でも、今日は二つのことについて述べたい

と思います。

一つ目は、シャワーの習慣の違いです。私の学校の寮ではシャワーを浴びる時間が決められています。シャワーは、一日に一回しか浴びられないルールがあります。そのことを聞いたときはとても驚きました。そして、もちろん大変困りました。そのとき何でシャワーの時間を決められているか。また、日本人は本当に朝の時間に、シャワーを浴びないのだろうか。このような、色々なことがわかりませんでした。皆さんはどうでしたか。日本に来る前はそんなルールがあるとは思いませんでした。マレーシアの学校はこのようなルールは全然ありません。いつでも好きな時間にシャワーを浴びることができます。いまでもこのことは不思議です。

しかし、今は少しわかってきました。日本にはお風呂の習慣があることがわかりました。そして、日本人はシャワーよりお風呂が好きということもわかりました。お風呂は、一日に一回入れればいいようです。もし、いつでもシャワーを浴びたら、水を使い過ぎるようになるので時間がきめられているということです。日本人は、清潔できれい好きなのに、これはやはり不思議ですね。

もう一つシャワーでマレーシアと日本の違いがあります。それは、日本ではシャワーからいつもお湯が出ることです。マレーシアは日本とぜんぜん違います。お風呂の習慣がないだけでなく、お湯もありません。マレーシアの人たちは朝でも昼でも夜でもつめたい水のままシャワーを浴びます。マレーシアは一年中暑いので、お湯が要らないのです。でも、お湯の出るシャワーはいいですね。

二つ目は、アニメや漫画とロボット技術の関係です。日本では色々な種類のロボットが作られていることを皆さんも知っていますよね。アジアでは日本の技術が

一番良いとされています。これは本当にすごいことだと思います。どうしてだろうと私なりに考えてみました。私が考えたのは、日本人が大好きなアニメと漫画です。想像したロボットが登場するアニメや漫画がロボット作りに影響しているのではないのでしょうか。想像したロボットを本物のロボットにする。夢を現実のものにするために技術が進歩しているのではないのでしょうか。

私の国マレーシアは日本のように、アニメを観たり漫画を読んだりしません。子供がアニメをみたり漫画をよんだりしているとお母さんやお父さんから「ダメ!」と注意されます。アニメや漫画ばかり見ていると賢くならないと言われます。でも、日本に来て、その考えが変わりました。日本人は、大人も子供もアニメや漫画が大好きで見えています。しかしロボットの技術はアジアで最高です。マレーシアのロボットの技術はあまり進んでいません。マレーシアでは漫画やアニメを子供は好きですが、大人はあまり好きではありません。これが、ロボットを作れない理由ではないのでしょうか。私もアニメや漫画があまり好きではありません。ですから、今は、多分ロボットを作れないと思います。今からロボットを作るために、私もアニメを見たり、マンガを読んで、興味を持つようにしようと考えています。

このように、国によって違う、習慣やものの考え方を皆さんにもわかってもらえるとうれしいです。今、私は日本に住んでいますから、日本の習慣になれ、日本の習慣を守ろうとしています。そして、日本人を尊敬しています。もし皆さんがマレーシアに行ったときは、マレーシアの習慣を理解し、マレーシアの習慣を守って欲しいです。そして、マレーシア人を尊敬してもらいたいです。よその国に行ったときは、その国の習慣を守ったり、その国の人々を尊敬したりして欲しいです。

世界を平和にするために、お互いに習慣や文化などを尊敬することが必要です。

色々な面から、マレーシアと日本の文化には違いがたくさんあります。それは、それぞれの国で考え方が違うので文化や習慣などが異なるのは当たり前です。それが異文化です。

皆さんは異文化についてどう思いますか。わたしは、今、日本で異文化を面白いと感じています。異文化が理解できないときもあります。不満が起きることもあります。しかし、そのようなことがないようにお互いの文化をわかることが必要です。

日本に来て、異文化を大切にしようと思っています。

「星の王子さまと私」

北川友美子（一般科目）



童話を選んだのは皆さんを子どもだと思っているからではありません。寧ろ、おとなになってしまった人へ捧げるべきものであるからです。

あまりにも有名なこの童話は、アントワヌ＝ド＝サンテグジュペリ というフランスの

作家によるものです。彼は1900年フランスのリヨンで貴族の家に生まれました。若い頃から空を飛ぶことに情熱を持ち続け兵役で空軍に入隊し、のちに民間のパイロットとして活躍します。飛行士の体験にもとづいて『夜間飛行』等を著し作家として成功をおさめ1943年、自ら挿絵を描いた『星の王子さま』を出版します。

私が初めてこの作品に出会ったのは小学校に入学した頃だったと思います。特に心に染みることもなく、忘れ去り、しばらく手に取る事はありませんでした。もっと魅力的でドキドキするような物語はたくさんありましたし、クラスの友達の間でも話題になるようなものではありませんでした。

再び手にしたのは10代になった頃でした。文章は平易だしセンスのよいかわいらしいユニークな挿絵があり、少女が好きになるエレメンツは揃っているのですが、彼の言わんとしていることがぼんやりとしか分からない、そんな印象でした。そしてその後、何度も繰り返して読むようになりました。

そうこうしているうちに私はおとなになり、数学を研究するようになりました。数学が少しだけ分かりはじめた頃、私はもう一度『星の王子さま』を読んでみました。すると今度はちょっとだけですが完全に意味がわかっていました。星の王子（以下敬省略）が如何に勝手なことを言っているかということです。私は彼を傲慢だと思いました。彼はいろんな星の専門家のところへいき、仕事の邪魔をしては質問ばかりします。また、自分の愛するバラの花を小さな星に残し、地球に降り立ちます。そして幸運にもキツネからたいせつなことを教えられ、バラの花が自分にとってたったひとつの存在であり、守ってやらなければならないことに気づきます。そしてほかのバラの花たちに向かって「あんたたちは美しいけど、ただ咲いてるだけなんだね。」とひどい言葉を投げかけます。本当の気持ちを言うのはいいけれど、他人を傷つけてもよいでしょうか。

星の王子が嫌いという気持ちはしばらく続きました。しかし自分が年齢を重ねるごとに、いろんな経験をjするたびに、そして数学を研究すればするほどにキツネの言葉が身にしみてくるようになりました。「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない」

本質は目に見えない、というキツネのこの言葉は数学だけでなく自然科学や工学、あらゆる分野のひとが共感することのできるものであり、人間の創る世界に響くアフォーリズムであると思います。

最近、数学者である古くからの友人と『星の王子さま』について話す機会がありました。あれはすばらしいよ、日常生活の本質が潜んでいくら読んでも読み足りないと言えました。友人は「ウワバミの絵」しか覚えていないというのでもう一度読み直したそうです。私が星の王子にたいしてある種の嫌悪感を持ち、実に傲慢である厄介なキャラクターであると主張していたことを友人は覚えていたようで「星の王子ってある意味で君にそっくりだよな」と言い出しました。半分意地悪で言っているのかもしれませんが、私はびっくりしてどこが似ているのかと、反論しました。他人の都合も考えず質問ばかりしてくるところや、正しいと思うことは絶対に押し通し、周囲の人を傷つけかねないところなどと言われました。「近親憎悪」という言葉を知っているかと、とどめを刺され、自分を省みるきっかけが与えられました。また別の数学者の友人いわく、私には他人にたいする責任感がなく、向こうが勝手にやったことだとか言いがちで自分のせいではないような態度をとるようです。少しでもその人とかかわりを持ったのであれば、何らかの責任が生じるということをつからないといけないよ、と教えてもらいました。この言葉と本質的には同じことをキツネが言っています。「めんどろみた相手にはいつまでも責任がある」これはバラの花のことを星の王子に説明するときの台詞です。

星の王子は人間ではなく、おとなの心の中に住んでいる子どもの心だという解釈が一般になされています。子どもの素直なところ、これとは表裏一体の無神経なところが自然に存在してしまうという残酷さ、これを如何にして包むかという課題が生じてきます。星の王子は、皆さんのところの中に存在しているはずで、今は分からなくても、自分のなかの星の王子を見つけるときがやがて来るでしょう。そのときには思う存分戦ってください。「おとな対子ども」です。

『星の王子さま』はあらゆる場面でアフォーリズムがちりばめられたよい作品であると思います。おとなになつたらもう一度是非手にしてみてください。

稚拙な文章で大変お恥ずかしいですが「思い出の一冊」の原稿とさせていただきます。

研究者として読みたい一冊

「科学者という仕事」

坂本 裕紀 (機械工学科)



『大切なのは、質問するのをやめないということ』……これは、本学機械工学科ホームページのスタッフ紹介内にある、私のプロフィール欄に書いている言葉である。とある有名な科学者の言葉であるが、私がこの言葉に出会ったのは、その科学者の自伝を読んだからでもないし、そういった類の歴史的書籍を読んだからでもない。実際にはこの、酒井邦嘉氏の『科学者という仕事——独創性はどのようにして生まれるか——』という本の中で出会った言葉だ。そしてこの言葉が、私の研究者としてのモットーとなったと言うのは少々大袈裟かもしれないが、まあ、それに近い言葉となって脳内にずっとずっと残留するようになったのは確かである。

私を含め、本学の教員は教育者であり研究者でもある。そして同時に、学生諸君も五年生になれば卒業研究を通して研究者というものになるし、本校を卒業して専攻科入学だとか大学編入学だとかを行えば、より一層研究者というものとして完成されていく。加えて、進学せずに就職したとしても、研究職に就くことだってあるし、ものづくりの現場というものは研究を伴うものであったりもする。ゆえに私は、研究者として存在する、または研究者として存在することになるであろう、本学教員や学生らに是非とも紹介したい本として、この一冊の本を選んだ。

私がこの本を手取ることになったのは、書店で見つけて一目惚れというわけではなく、学生というものから社会人へ変わる時に、人から贈ってもらったことで、偶然にも手元に置くことになったことがきっかけだ。詳しく述べると、大学にて博士後期過程を修了し、助教として働くことになった際、当時所属していた研究室の、准教授の先生から、ある意味研究者としての心得のようなものとして、贈っていただいた本である。「餞別としては随分と安上がりだけれども、是非とも読んでみてくれ」と、そんな感じの言葉と一緒に。それから数年ほど経過してこの大分高専に赴任してから、教育者として授業に励みながらも研究者としての気概を失わず居られるのは、

少なからずこの本に感銘を受けたことも理由の一つとして挙げられるかもしれないし、そういう本であるとも思っている。だからこそ、私は自身の研究室にやって来た時、この本も一緒に持ってきて、教科書を並べるよりも先に棚へ置いた。

さて、前置きが長くなったが、この本を開けば、あまりにも……まったくもって本当に、あまりにも歴史的に有名な科学者達が登場してくれる。

アルバート・アインシュタイン、アイザック・ニュートン、ノーム・チョムスキー、朝永振一郎、チャールズ・ロバート・ダーウィン、マリー・スクロドフスカ・キュリー……

そうそうたる面子であり、そんな、あえて簡単な言葉で評するならば、『最高の』科学者達の様々な言葉に出会うとともに、研究者としての本質へ触れることが出来る……それが、この本である。

先に言うておくが、この本は決して偉人列伝とかいうものでも、座右の銘一覧とかいうものでもない。確かに私のように、「そういった言葉」を見つけることも出来るかもしれないが、この本が伝えているのは、そういうものだけではない。勿論、彼らの人物像や歴史的背景、研究者としての逸話を知ること出来るが、本質は以下の事柄に繋がっていく。

研究者とは？ どうやったら研究者になれて、どのように研究するのか？ どうやって『個』を磨いていくか？ 如何にして研究を続けていくか？ その研究をどのように発表するのか？ 研究者とはどうあるべきで、教育と研究はどう違うのか？ どんな責任や使命があるのか？ そして、そこから『独創性』というものがどうやって生まれてくるのか？

とてもとても考えさせられるし、或いは共感出来るし、ともすれば「尻を叩かれるような」感覚にさえ陥る。前述の、最高の先達らに、だ。本当の研究者であれば、ある種の焦燥のようなものすら感じるかもしれない。この本を読んで、すぐさま研究を始めたいと思えるならば、それは紛うことなき研究者であると確信している。学会に出て発表しようとか、ちょっと論文を書いてみようとか……それは、学生諸君にはまだ分からぬ領域かもしれないが、似たような感覚を得たのであれば(例えば、新しいものに挑戦してみようとか)、それはおそらく、研究者としての種が少しばかり発芽したといえるだろう。そう感じてもらいたい為に、改めて言うが、この本を本学教員や学生らに読んでもらいたい本として選択した。

ただ一言……「あなたが科学者・研究者として在るのならば」……是非とも。

研究者というものを知る、もしくは再認する、そのきっかけがここに在るのだから。

オーストラリア外留記

制御情報工学科 嶋田 浩和

はじめに

2009年度オーストラリアのメルボルンに留学をいたしましたので、その経験を少し紹介したいと思います。

オーストラリア

オーストラリア（正式名称；Commonwealth of Australia）は、ご存知の通り1901年イギリスからの独立をした、まだ新しい国です。第1～3の都市はシドニー（Sydney）、メルボルン（Melbourne）、第3の都市はブリスベン（Brisbane）であり、首都であるキャンベラは大きい都市ではなく、日本の首都のイメージとはかけ離れきれいに整備されています。人口は日本の約5分の1、面積は約20倍、なんと人口密度は約100分の1、具体的にいうと1平方キロメートルあたり3人（ちなみに日本は330人）です。この国には、英国と同じエリザベス2世が女王としていて、実はイギリス連邦王国の1つでもあります。現在は首相もジュリアギラードという女性が首相をつとめています。

この国は、豊富な地下資源をもち、独立以前の1850年代にはゴールドラッシュがあり、中国をはじめ色々な国からの移民がありました。このような歴史的背景をもとに現在移民の国として知られています。主要な産業は、前段の地下資源の輸出もありますが、第1次産業のうち農業が非常に盛んで、オージービーフなどは日本でもおなじみだと思います。これに続き農産物の加工品もオーストラリア産ワインやチーズも有名です。他に日本の人のイメージでは、グレートバリアリーフで有名できれいな海や巨大な1枚岩俗名エアーズロック（正式名称；Uluru）が一番出てくるのではないのでしょうか。観光地としても日本ではなじみが深いと思います。

しかし、工業についてはかなり日本が進んでいると思います。例えば車メーカーはHOLDEN 1社であり、電気メーカーも数社です。スーパーマーケットも2つの大きな会社がほとんど出店している状態で、必ずしも就職先が吹く差なる訳ではありません。オーストラリアも他の国と同様に経済の縮小がおこっており、なかなか日本のような雇用形態では職が無いうえ、日本では定年と思われる人も働いており、若者の就職先が無いという社会的な問題へと発展しています。



オーストラリアの国旗



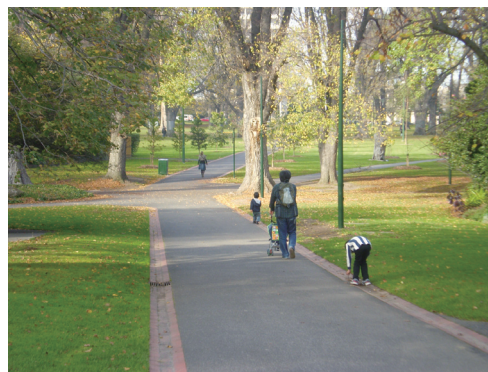
オーストラリアの地図



上空から見たメルボン市街地



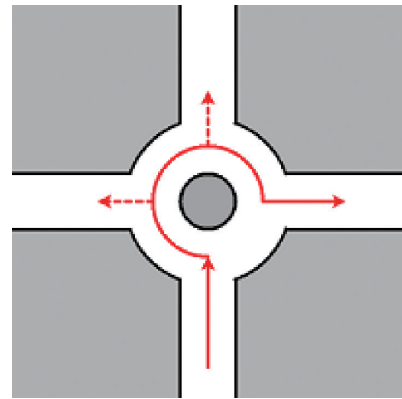
様々な国からの移民がいる小学校



公園の様子



公園の写真（ブラックスワンの親子）



ラウンドアバウトの図

オーストラリアでの生活

メルボンの雰囲気

メルボルン(Melbourne)で過ごしました。現地ではメオベンまたはメルボンと呼ばれています（現地でメルボルンと発音すると怪訝な顔をされるので注意しましょう）。メルボンは、前述した通りオーストラリア第2ですが、実は人口は380万人を越す都市でありながら、人口密度が1600人程度でそんなに混んだイメージはない都市です。

メルボンの気候は、非常に過ごし易い気候だと思います。夏は40℃を越す日も珍しくありませんが、日陰は非常に涼しく、その上夕方3時ぐらいになると晴れていても一挙に25℃程度まで下がり涼しくなります。これをCool Changeとよびます。このCool Changeのおかげで熱帯夜もありません。

また、住んでいる人も人よく、大半の人は親切に対応してくれます（もちろんracistと呼ばれる人たちはいますが）。日本からの移住者のうちにご高齢の人が見受けられます。この住み良い気候と環境が多く影響しているのではないかと思います。事実、お会いした人たちは、住み易くてとてもいいとおっしゃっていました。

メルボンの生活

メルボンでは、都心部から約6kmはなれたKewという名の住宅街(suburb)の一戸建てに住んでいました。周囲は、本校が2つほど入る広い公園（写真）が2カ所あり、オウムやクジャク（写真）が飛んできて餌をとっている風景が見られるのどかな所でした。ここが特別な所ではなく、メルボンではこのような大きな公園が至る所にある都市で、ヴィクトリア州自体がGarden Cityと呼ばれる非常に環境のよいところ です。

また、交通手段も環境に配慮したシステムになっています。公共交通機関が発達しており、電車、バ

スはもとよりトラム（路面電車が市内中心部から半径10Km程度まで）があり、車が無くても市内までは、行く事が容易になっています。また、パークアンドライドが発達しており、日本のような暫定的に作ったものでなく主要なバス停やトラムステーションには、必ず直近に駐車場があり、何の抵抗も無くバスなどの公共交通機関を利用できるようになっています。他にも違った交通ルールが見られます。どちらかという日本が変わっているのかも知れません。その例として、ラウンドアバウト（図参照）が挙げられます。このシステムは信号機を用いずに交差点での交通整理を行う便利なシステムで、日本では信号に従い、たとえ横から車が来ていなくても赤信号であれば止まらなくてはなりません。ラウンドアバウトだと安全確認をして、通行が可能になり無駄なアイドリングをする必要がなくなります。知り合いのオーストラリア人がこのラウンドアバウトと信号機に関して、“日本人はお金を使って交通整理をするが、オーストラリア人は知恵と広大な土地を使って交通整理をする”と言った事を思い出します。今更ながら、アイドリングストップなどを掲げているのは滑稽に思っているかもしれません。

オーストラリアでの教育制度

オーストラリアの教育制度に関しては、いろいろな留学に関する資料が出ていますので特徴的な事のみを記しておきたいと思います。日本は中学で義務教育が修了しますが、基本的に18歳で義務教育は修了します。また、その後の進路に関しては、プライベートスクールをのぞいて、日本のように入試制度はありません。すべて18歳の時の最終学年におけるオーストラリアの一斉試験で次に進む事のできる大学が決定する仕組みになっています。オーストラリア人は、のんびりしていると考えがちですが、じつはこの時期、日本の塾のように学校終了後に

after school schoolに必死に通って、成績を納め進路を決定しています。また、primary school や secondary schoolでは、オーストラリア中で毎年一斉に学力試験を行い、学校のランキングが新聞などに一斉に公表されます。これで子供を転校させたりする親もいるほどです。意外と教育熱心である事がうかがえるかと思います。

メルボンの図書館

さて、情報をどのように入手するか？に関して、考えてみたいと思います。私が通っていたRMIT大学では、有線のLANはもとより、館内のカフェテリアでも無線LANが張り巡らされ、利用許可をえたものに限って、自由に使用できるよう設定されています。その中にまず、学生は授業やレポートで活用するほか、イベントや奨学金の情報なども得ていました。一般の市民は、ファーストフード店では、Free WiFiが当たり前であり、目抜き通りや主な通りを数十m歩くとインターネットカフェがあり、1時間あたり3AUD(約250円)程度の非常に安く使う事ができ、日本の立ち後れが非常に感じられました。

また、図書館でも明らかに日本の遅れが感じら

れます。大分と比較してみましよう。確かに都市の規模が違うので一概に比較はできませんが、メルボンでは州立図書館、市立図書館に加え各居住区で図書館を運営しているのです。例えばKEWは、Boroondaraという行政区で図書館を運営していて、各居住区に図書館があります。毎日夕方6時まではオープンしており住人は登録さえすれば、無料で使用できます。各居住区の図書館の蔵書数は、ある程度あるもののそんなにたくさんはありません。しかし、各図書館が連携しており、近くの図書館に無ければ、他の図書館の蔵書をインターネットから検索し、予約することが可能であり、予約日に借りるのも近くの図書館でできると言う便利さがあり、多くの人たちが利用していました。このような仕組みが近くにあると自分も本を買わずに住むのになどとうらやましい点がありました。

最後に

基本的に日本より優れている、または便利な点を紹介いたしました。海外になるべく興味を持っていただき、海外の様々な良い点を体験していただく契機になれば幸いです。

平成22年度 読書感想文コンクール入選者

	クラス	氏 名	作 品 名	著 者 名
第1位	4 S	松 下 達 也	アルジャーノンに花束を	ダニエル・キイス
第2位	4 S	橋 本 隆太郎	神様のカルテ	夏 川 草 介
第3位	4 M	宮 崎 聡 志	十五少年漂流記	ジュール・ヴェルヌ
佳作	1 E	矢 野 紘 樹	レキシントンの幽霊(沈黙)	村 上 春 樹
〃	1 C	諫 山 恭 平	人間失格	太 宰 治
〃	1 M	岩 丸 尚 輝	ホームレス中学生	田 村 裕
〃	1 S	宮 崎 慎 也	週末のフール	伊 坂 幸太郎
〃	1 C	玉 田 舞 香	告白	湊 かなえ
〃	4 E	橋 爪 里 奈	涙忘恋歌	朝 丘 辰。
〃	1 E	秋 月 貴 裕	フランダーズの犬	マリー・ルイーズ・ド・ラマー

編 集 後 記 図書館長補佐 大木 正明

昔から異なる遺伝子や血液が混じり合い異種配合されると、より強力な次世代の種が生まれることは良く知られています。これは、遺伝子学レベルに限らず、特に私たちが日常追い求める「知識」の分野でも同じことが言えるのです。科学に限らず哲学・文学・歴史学など多くの種類の書物を読み、また専門分野でも少し違った分野のテキストを読み進めていくうちに、自分の中の知識も増し知恵となり、その人は自分自身という「人格」を形成していきます。皆さんも何でも構いません、積極的に本を読んでみては如何ですか。